

発掘調査報告第14集

駒ヶ根東部土地改良区東部地区県営ほ場整備事業（昭和57年度分）

埋蔵文化財緊急発掘調査

上 塩 田 遺 跡

—緊急発掘調査報告書—

1983

南信土地改良事務所

駒ヶ根市教育委員会

序 文

今回ここに刊行の運びとなりました報告書は、竜東地区の県営ほ場整備事業に伴い、昭和57年度に実施された埋蔵文化財緊急発掘調査の報告であります。

発掘調査を行いました上塩田遺跡は、竜東東伊那地区に属し、伊那山脈の一要所であります高鳥谷山に源を発する塩田川の右岸段丘上に位置しています。地元では古くから塩田の遺跡として注目され、耕作の際には、多くの遺物が出土したと住民の方々からお聞きしていました。当調査の結果、縄文時代の住居跡や遺物、平安時代の住居跡や遺物など数多くの遺構と貴重な遺物が発掘され、緊急発掘調査ではございますが、東伊那の歴史の解明の為の新しい資料が加えられました。当報告書の各章にみられます多くの遺構や遺物が、今後の研究に果たす役割は大きなものがあると確信しております。

さらに長期間にわたって発掘調査をご指導下さった友野良一団長を始め、快く発掘作業に参加していただいた地元の方々、事業に深いご理解をいただいた東部土地改良区並びに南信土地改良事務所の方々、地主の方々等、多くの皆さまのご協力、ご厚意によりまして所期の目的を達成することができました。

ここに関係者の皆さま方に心から感謝申し上げますとともに、この報告書が学界のお役に立つことを念願する次第であります。

昭和58年3月20日

駒ヶ根市教育長 木下衛

凡例

1. 今回の調査は昭和57年度に実施された駒ヶ根東部土地改良区東部地区県営は場整備事業に伴うものである。
2. 事業は、南信土地改良事務所の委託（事業費174万円）及び国県補助事業（事業費66万円）により、県営は場整備事業駒ヶ根東部地区埋蔵文化財発掘調査会が実施したものである。
3. 本報告書は、昭和57年度中に業務を終了する義務があるため、調査によって明らかとなった遺構及び遺物をより多く図示することに重点をおき、文章記述はでき得る限り簡略した。
4. 本報告書の執筆・編集は、小原晃一が担当した。
5. 遺構関係の図面は、小原と下平美智子が製図し、縮尺はその都度指示してある。
6. 遺物整理作業の中で、土器の復元を小松原義人が担当し、土器・石器の実測を小原・矢沢秀樹が、土器の拓影、土器・石器の製図を小原が担当した。
7. 本遺跡の遺物及び実測図類は、市立駒ヶ根博物館に保管してある。
8. 挿図中のNo.は、通し番号であり、本文中の番号と一致する。
9. 遺物の表示については、下記のとおりであり、その外のものについては、指示してある。

△—縄文早期土器	▲—黒曜石	★—剝片石器
●—〃 前期土器	★—打製石斧	
○—〃 中期土器	▲—敲打器	
Ⓐ—〃 後期土器	◎—剝片	
○—〃 晩期土器	●—石鎌	
●—土師器	▣—搔器	
■—須恵器	▲—石匙	
□—灰釉陶器	△—石錘	

目 次

序 文	
凡 例	
目 次	
挿 図 目 次	
図 版 目 次	
第I章 発掘調査の経緯.....	1
第1節 発掘調査に至るまでの経過.....	1
第2節 調査会の組織.....	1・2
第3節 発掘作業経過.....	2・4・7・8
第II章 遺跡の環境.....	9
第1節 位置及び地形.....	9
第2節 歴史的環境.....	9
第III章 発掘調査.....	10
第1節 調査概要.....	10
第2節 調査A地区遺構と遺物.....	11
第3節 調査B地区遺構と遺物.....	15
第4節 調査C地区遺構と遺物.....	16
第5節 調査D地区遺構と遺物.....	21
第6節 調査E地区遺構と遺物.....	22
第IV章 まとめ.....	24

挿 図 目 次

第1図 上塩田遺跡位置図.....	3
第2図 上塩田遺跡地形図.....	3
第3図 上塩田遺跡調査区及び遺構分布図.....	5
第4図 上塩田遺跡周辺遺跡分布図.....	10
第5図 A地区第1～5号土坑実測図、出土遺物分布図及び実測図.....	12
第6図 B地区第1号住居跡覆土遺構実測図、遺物分布図及び実測図.....	13
第7図 B地区第1号住居跡実測図及び遺物分布図.....	14
第8図 B地区第1号住居跡出土遺物実測図.....	15
第9図 C地区出土遺物実測図.....	16

第10図	C地区1～3G遺構実測図及び遺物分布図	17
第11図	C地区1・2G出土遺物分布図	19
第12図	C地区1・2Gピット群及び出土遺物分布図	20
第13図	D地区第2号住居跡実測図及び出土遺物分布図	21
第14図	D地区第2号住居跡出土遺物実測図	21
第15図	E地区第3号住居跡実測図及び出土遺物分布図	22
第16図	E地区第3号住居跡出土遺物実測図	22

図 版 目 次

- 図版1 上塩田遺跡遠景・近景・調査風景・調査A地区全景・土塙1・2号
- 図版2 調査A地区土塙3～5号、調査B地区全景、第1号住居跡遺物出土状態、調査終了状態
- 図版3 調査B地区第1号住居跡遺物出土状態、調査C地区1・2、土層状態、1～3G遺物出土状態、調査C地区全景、ピット群、調査D地区全景、第2号住居跡
- 図版4 調査D地区第2号住居跡遺物出土状態、調査E地区全景、近景、第3号住居跡土層状態、第3号住居跡、遺物出土状態、調査A～C地区調査終了状態
- 掲載遺物一覧表

第 I 章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至るまでの経過

駒ヶ根市東伊那上塩田に位置する上塩田遺跡が駒ヶ根市東部土地改良区東部地区県営ほ場整備事業の施行区域に入ることで、昭和56年9月1日に、長野県教育委員会、南信土地改良事務所、駒ヶ根市役所農林課、駒ヶ根市教育委員会の出席のもとで、事前協議をした結果、記録保存を行うということになり、駒ヶ根市教育委員会を中心とした埋蔵文化財調査会が調査団を編成し発掘調査を実施することとなった。

昭和56年10月20日に、南信土地改良事務所長と駒ヶ根市長との間に「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を取り交わし、つづいて駒ヶ根市長と埋蔵文化財調査会会长との間で再委託契約を締結した。昭和56年度は発掘調査作業を、昭和57年度は整理作業を各々実施するものであった。

調査は県営ほ場整備事業駒ヶ根東部地区埋蔵文化財調査会が行うこととし、調査団を編成して、団長には友野良一氏をお願いし、調査の準備に入った。

第2節 調査会の組織

●県営ほ場整備事業駒ヶ根東部地区埋蔵文化財調査会

会長 木下 衛（駒ヶ根市教育長）
理事 小池金義（〃 教育次長）
〃 宮脇昌三（〃 文化財審議委員）
〃 松村義也（〃 〃 ）
〃 竹村進（〃 〃 ）
〃 増沢広人（市立駒ヶ根博物館長）
監事 中原正純（市文化財保存会会长）
〃 北原名田造（駒ヶ根市郷土研究会会长）
幹事 北沢吉三（市教育委員会社会教育係長）
〃 小林晃一（〃 社会教育係）
〃 野々村はるゑ（市立駒ヶ根博物館）
〃 北原和男（〃 ）
〃 小原晃一（〃 ）

●調査団

団長 友野 良一（日本考古学協会会員） <発掘担当者>

調査員 小原 晃一（長野県考古学会会員） <>

" 小町谷 元

調査補助員 小林 敏子

" 田中 清文

指導者 関 孝一（長野県教育委員会指導主事）

白田 武正（ " ")

郷道 哲章（ " ")

林 茂樹（日本考古学協会会員） [順不同、敬称略]

第3節 発掘作業経過

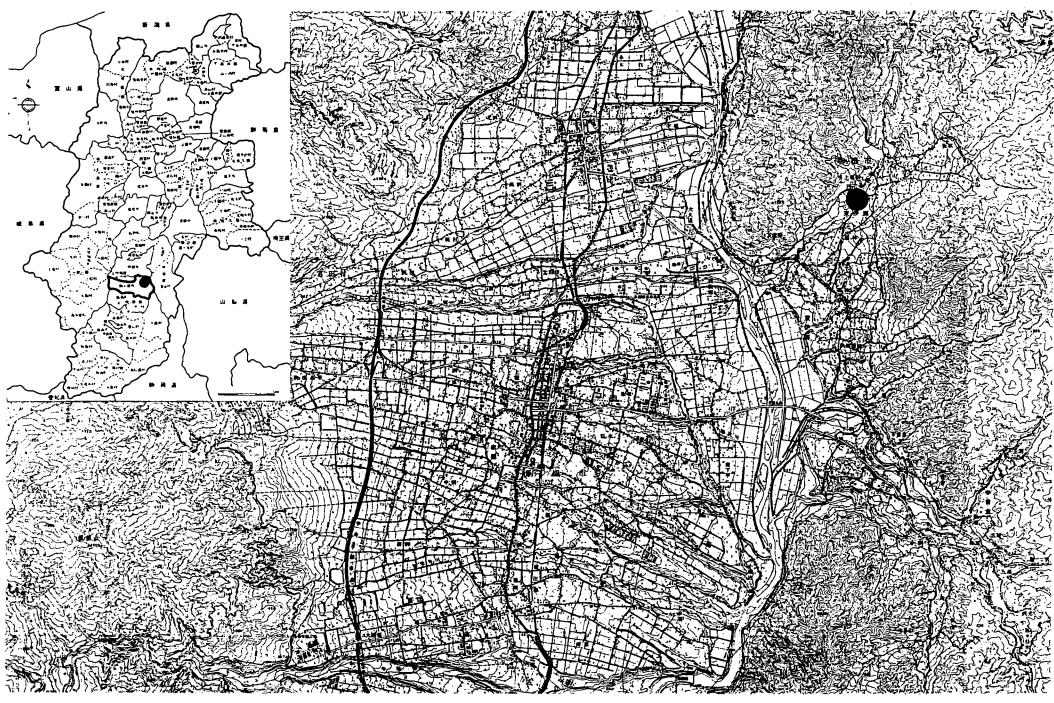
●発掘作業日誌

10月20日 現場にて発掘作業の打合せを行う。友野団長より当遺跡の概要説明を受ける。調査区域の中へ、南北軸に沿って、A・B・C・D・Eのトレンチを、東西軸に沿って、あ・い・う・え・お・か・きのトレンチを、10m×10mごとに設定し、その中に、1・2・3・4……と番号を設けた。調査区西側の草刈り、テント設営を午前中行ない、午後は、あ・い・C・Dトレンチを掘り下げる作業と200分の1の縮尺で全体の地形測量を行う。

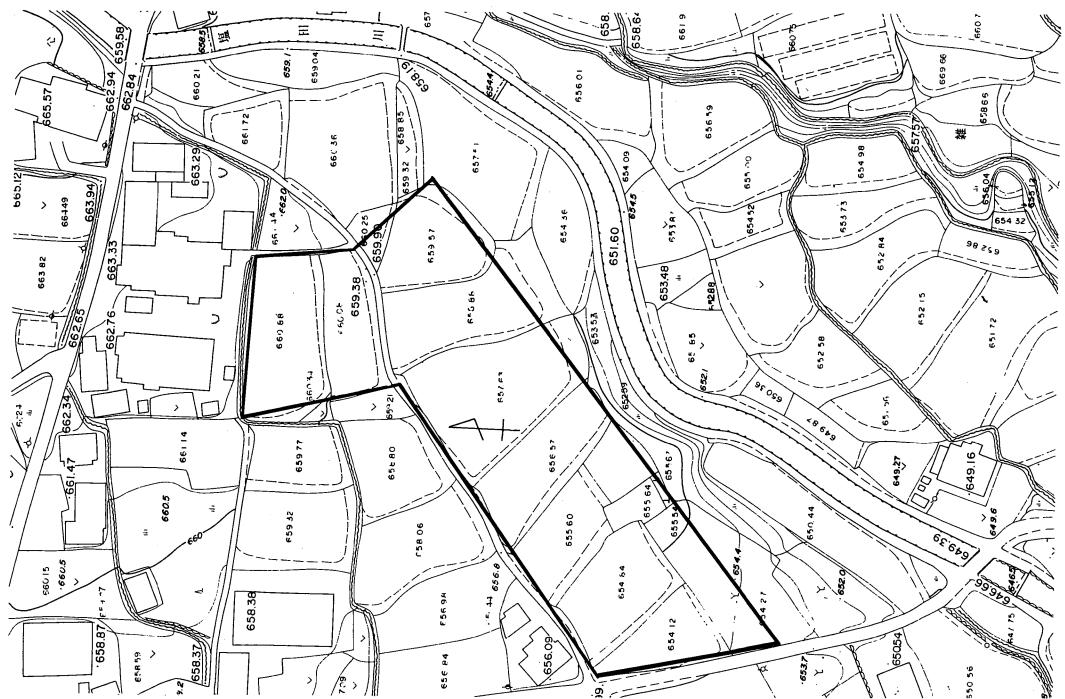
10月21日 あ・い・C・D・Eトレンチの掘り下げを行う。あ・い-3～5、D・E-1～3トレンチの断面実測を行い掘り下げ終了する。さらに、う・え-2～5、B・C・D-4・5トレンチを掘り下げ終了する。B-6～8トレンチは途中まで掘り下げる。い-3トレンチからは繩文土器片1点、打製石斧1点、い-5からは陶器片2点、打製石斧1当、あ-4からは打製石斧1点が各々出土したが、遺物包含層として把握できる層は無かった。基盤には、砂質ローム層があり、さらに礫が多く見られる。B・Mを、標高657.100mに設定する。

10月22日 雨天の為、現場作業中止。

10月23日 お・か-1～3、B・C・D-6・7トレンチを掘り下げる。う・え-2～5、B～D-4・5トレンチの断面実測、う-3～5トレンチの写真撮影を行う。さらに、お・き-2～4、B～D-6・7トレンチを掘り下げ終了し、E-6、7は途中まで掘り下げる。C・D-6・7トレンチの間に、古河原と考えられる溝状の遺構が検出される。その外の遺構はきょうまでのところ検出されていないが、各トレンチともに土手際の付近に良好なローム面が見られ、黒色土層もその上にやや厚く堆積している。



第1図 上塩田遺跡位置図 ($S = 1/200,000$)



第2図 上塩田遺跡地形図 ($S = 1/2,000$)

10月24～26日 雨天の為、現場作業中止

10月27日 か－4・5、き－1～4、B－8・9トレンチ掘り下げ。え－2～5、B～D－4・5トレンチ写真撮影、B－5～7、D－5・6トレンチ断面実測。A～E、あ～きトレンチ掘り下げ部分を、ブルドーザーで耕作はねを行う。この調査区を調査A区とする。A区東側上の段の草刈りを行い、C'－1～3、D'－1～3トレンチを設け、掘り下げる。調査A'区とする。出土遺物は、C'－1から弥生後期土器片1点、灰釉陶器片1点、D'－1から陶器片1点、D'－2から土師器片1点、繩文中期土器片1点が各々出土している。

10月28日 C'・D'－1～3トレンチの断面実測、写真撮影を行う。調査A区のD－4～6、B－6・7トレンチ下を拡張する。

調査A区の東側上の段の田を調査B区とし、南北軸にあ・いの2本のトレンチを入れる。いトレンチの南部分は基盤がしっかりしている。あトレンチの北部分は陶器の大形片が出土し、礫が多いが落ち込みがあると考えられる。

10月29日 雨天の為、現場作業中止。

10月30日 調査A区の全体の写真撮影とお・か－2・3トレンチ下、う・え－3・4トレンチ下拡張部分を平板測量する。調査B区のあ・いトレンチの掘り下げを行い終了する。あトレンチ北部分を7m×9mに拡張して掘り下げる。この中より、繩文早期末から前期にかけての土器片と打製石斧、土師器片が出土し、焼土も検出されはじめる。

10月31日 調査A区お・か－2・3拡張部分の南側を拡める。調査B区の落ち込みを1号住居跡とし掘り下げる。土師器壺がほぼ完全な形で出土する。写真撮影を行う。

11月1日 調査A区お・か－2・3拡張部分を東へさらに拡める。調査A'区C'・D'－あ・いトレンチ(南北)を南へ拡張する。調査B区第1号住居跡を掘り下げ、出土遺物・礫を平板測量し、遺物を取り上げる。

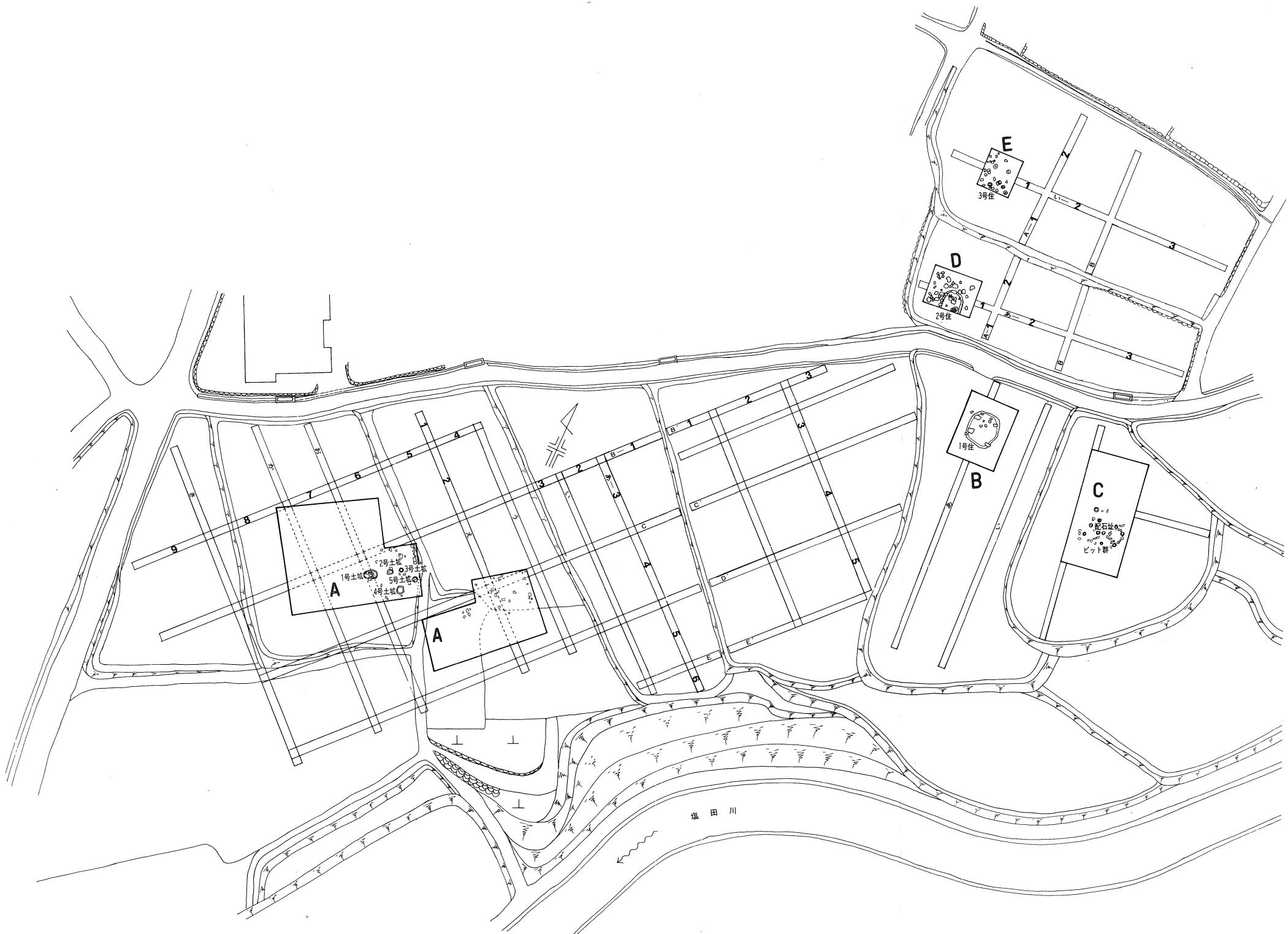
11月2・3日 雨天の為、現場作業中止。

11月4日 調査A区お・か－2・3拡張部分の礫群の一部を全測図に記入。調査A'区のC'・D'－2の間を5m×5mの範囲で大グリッドとして掘り下げる。ベルトを十文字に設定し、西側半分を掘り下げ終了し、東側は半分まで終了する。調査B区のあ・いトレンチの断面実測と写真撮影を行う。

11月5日 調査A区お・か－2・3拡張部分の範囲を平板測量する。調査A'区の大グリッドの東側半分の残りを掘り下げほぼ終了する。北東部よりピットのような落ち込みを確認するが、プランと床面が明確でないことから遺構として把握できない。この周辺より繩文中野土器片1点と打製石斧片1点が出土している。調査B区1号住居跡を除々に掘り下げ、写真撮影を行う。

11月6日 雨天の為、現場作業中止。

11月7日 調査A区お・か－2・3拡張部分の自然礫群を把握のため、平板測量を一応する。調査A'区の範囲を全測図に記入。調査B区の東側上の段の田を調査C区とし、トレンチを設定し、掘り下げと拡張を行う。トレンチ断面を観察すると、遺物包含層と考えられる茶褐色、黒褐色土



第3図 上塩田遺跡調査区及び遺構分布図 ($S = 1/600$)

が良好に堆積している。又、土層中に木炭等の炭化物が多く見られる。

11月8日 調査A区お・か-2・3拡張部分の仮清掃と土塙と思われるピットの $\frac{1}{2}$ カットを行い掘り下げる。調査B区1号住居跡の遺物実測と取り上げを行う。調査C区の掘り下げを行う。南側より1・2・3Gと設定し、東西にベルトを2本設ける。2Gは黒褐色土が厚く堆積し、礫も多い。同区より繩文後期土器底部片や打製石斧が集中して出土している。

11月9日 調査A区お・か-2・3拡張部分の土塙1～5号断面実測と遺物実測を行い、遺物の取り上げ・写真撮影も行う。調査A'区のベルトの断面実測と写真撮影を行う。調査C区の掘り下げを行い、南端と北端は砂質ローム層中及び上位に礫が多く見られ、中央部が溝状に凹んでいて、そこに黒褐色土が厚く堆積し遺物も集中していることが判明した。

11月10日 調査A区のベルトはずしと、下層の層位を見る為に、さらに東西に幅40cmのトレーナーを入れる。調査B区1号住居跡を掘り下げる。住居跡プランの把握は困難で、住居跡中央覆土に焼土が堆積しており、さらに北西壁寄覆土にも焼土が集中している。かなり浮いていることと出土遺物が、上層からは土師器が下層からは繩文時代の早期末～前期、中期の土器片、黒曜石片打製石器片などが層位別に出土することから住居跡が重複しているとも考えられる。調査C区の1～3Gの仮清掃と遺物・礫群の平板測量、写真撮影を行う。

11月11日 調査A区土塙群（1～5）の写真撮影。調査B区1号住居跡の下位住居跡の床面直上位まで掘り下げる。同住居跡の写真撮影。調査C区1～3Gの出土遺物と礫群の平板測量を行い、さらに掘り下げる。2G中央部は礫が環状を呈しているように観察できる。

11月12日 調査B区1号住居跡出土遺物の実測、取り上げを行う。黒曜石片が多く出土している。写真撮影。調査C区1～3Gを掘り下げる。1・2Gは仮清掃をし、3Gは掘り下げが途中である。出土遺物は繩文後期土器片、打製石器片、黒曜石片などが多い。

11月13日 調査C区の北側上の段の田に調査D区、さらに北側に調査E区を設定し、草刈りを行う。調査B区1号住居跡の礫群を平板測量し、レベルを測る。調査C区1～3Gの写真撮影、出土遺物の実測、取り上げを行う。調査D区に、南北にA・B、東西にあトレーナーを設け、掘り下げをはじめる。

11月14日 調査D区のA・Bトレーナー、あトレーナーを掘り下げる。あ-1トレーナー部分には礫が集中しているが、土師器も多く出土している。Aトレーナーは礫が少なく、あ-2・3トレーナー部分及びBトレーナーは礫が多く、出土遺物は、B-2トレーナー部分より石皿と思われる石器が出土地している。

11月15日 調査B区1号住居跡を仮清掃し写真撮影をする。調査C区2Gの出土遺物と礫群の平板測量とレベルを測る。同区のベルト2本の断面実測と壁面の断面実測を行い、写真撮影をする。

11月16日 調査B区1号住居跡を掘り下げる。調査C区のベルトはずしと仮清掃を行い、写真撮影を行う。調査D区のトレーナーを掘り下げる。あトレーナー西側部分より焼土が検出され、緑色釉が施された陶磁器底部片が出土している。

11月17日 調査B区1号住居跡のベルト実測と写真撮影を行う。調査C区の2G出土遺物を実測し、写真撮影を行う。さらに、柱穴址と思われる落り込みが10数ヶ所検出されたので、掘り下げる。調査D区西端の遺物集中部分を5m×6mの範囲で拡張して掘り下げる。土師器片が多く出土し、打製石斧や石鏃なども出土している。

11月18日 調査B区1号住居跡の焼土集中部分2ヶ所に十文字のベルトを入れカットする。写真撮影をし、出土遺物を実測し取り上げる。調査C区の東側壁断面実測を行う。写真撮影。調査D区のベルト実測、写真撮影を行う。調査E区のいトレント、C・Dトレントを掘り下げる。調査D・E区の範囲を全測図へ記入する。調査D区遺物集中部分を第2号住居跡とする。

11月19日 調査B区1号住居跡の焼土部分実測。出土遺物を測量し取り上げる。調査D区拡張部分の掘り下げとベルトはずしを行い、仮清掃をする。調査E区の遺物集中部分を4m×5mの範囲で拡張し、ベルトの断面実測を行い、仮清掃をする。

11月20日 調査B区1号住居跡の出土遺物を実測し取り上げる。清掃後、写真撮影をし、住居跡プランを実測する。調査B・C区の範囲を全測図に記入。調査D・E区を清掃し写真撮影を行う。調査E区遺物集中部分を第3号住居跡とする。

11月21日 調査D区2号住居跡の遺物を測量し、取り上げる。写真撮影を行う。調査D・E区のトレント断面の清掃を行い、写真撮影をする。

11月22日 雨天の為、現場作業中止。

11月23日 調査D区2号住居跡の出土遺物を実測し、取り上げる。写真撮影を行う。仮清掃をする。2号住居跡のプランを実測する。調査E区3号住居跡の出土遺物を実測し取り上げる。調査D区のトレント断面を実測する。調査E区3号住居跡のプランを実測する。

11月24日 調査D区2号住居跡、調査E区3号住居跡の清掃を行い、写真撮影を行う。調査D・E区の各トレントの断面を実測し、写真撮影を行う。

本日にて、当遺跡の発掘調査を全て終了した。

〔発掘調査参加者名簿〕

中村文夫、小林正信、小林満寿子、白川仁重、白川正子、湯沢二三子、渋谷鉄雄、渋谷吉子、今井梅代、佐藤慶子、福沢春子、湯沢智子、林志づ子、下平和枝、

(順不同、敬称略)

〔協力者〕 宮脇 守

1ヶ月にわたり、寒風にさらされ、初雪の降る季節の中で、発掘調査に参加・協力していた方々に、心からの感謝の意を申し上げる次第です。本当にありがとうございました。

(小原晃一)

第 II 章 遺 跡 の 環 境

第 1 節 位置及び地形（第 1～3 図）

当遺跡は、駒ヶ根市東伊那上塩田5162～5210番地に所在する。国鉄飯田線太田切駅より北東へ約4kmに位置し、標高655m前後である。

駒ヶ根市は三つの地区に分かれ、天竜川をはさんで西側に赤穂地区、東側の南部分に中沢地区、北部分に東伊那地区があり、その内の東伊那地区の北寄りに当遺跡は位置している。

伊那谷は、長野県の南信地域にあり、西に木曽山脈（中央アルプス）があり、東に赤石山脈（南アルプス）、中央構造線をはさんで戸倉山、高鳥谷山を初めとする前山の伊那山脈が並行して南北に走っている。この伊那山脈の一角をなす高鳥谷山より源を発する塩田川が造り出した扇状地のほぼ中心部分に位置し、同河川の右岸段丘上に立地している。

地質基盤は礫層からなり、その上に新期ローム層が堆積している。

当遺跡の層位は、塩田川の氾濫原という自然的条件や開田時の土層の移動等により、礫層の表出が顕著に見られ、必ずしも一定の層位を示していない。耕作土（表土—暗褐色土）を第I層として次に示すとおりである。

第I層——耕作土（表土—暗褐色土）

第II層——地場土（暗黄褐色土）

第II'層——暗茶褐色土（木炭粒含む）

第III層——茶褐色土（木炭粒含む）

第III'層——茶褐色土（ローム粒・木炭粒含む）

第IV層——暗茶褐色土（ローム粒・木炭粒含む）

第IV'層——暗茶褐色土+黒色土混土層（ローム粒・木炭粒含む）

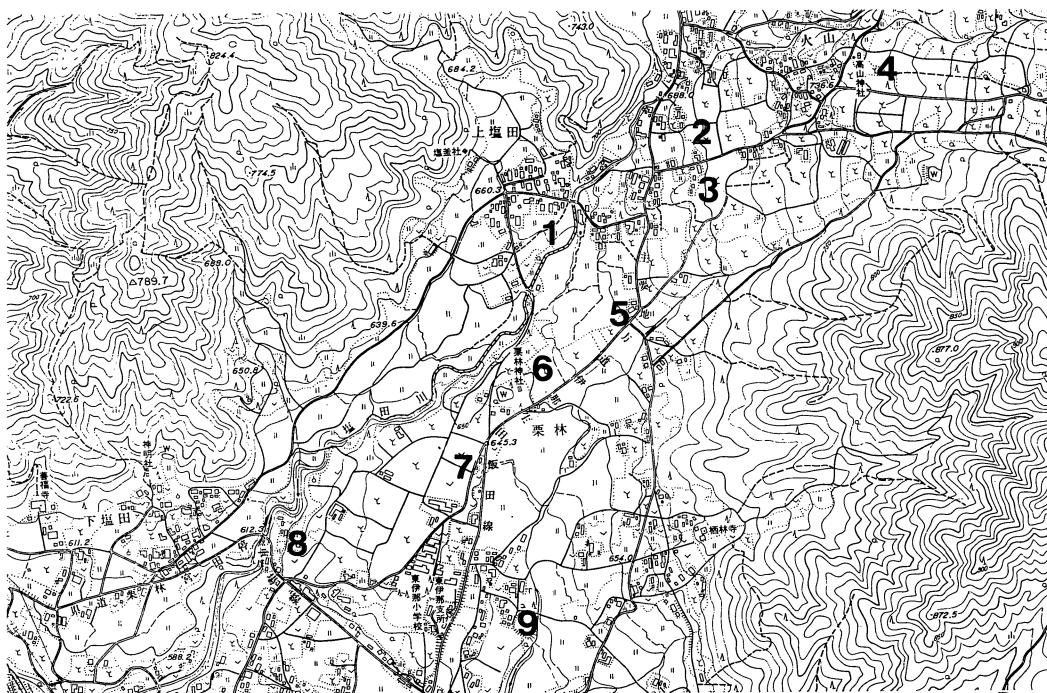
第V層——黒色土（ローム粒・木炭粒含む）

第VI層——砂質ローム層

第VII層——砂質ローム腐植質土

第 2 節 歴 史 的 環 境（第 4 図）

東伊那地区には、古くから弥生時代の遺跡や中世の遺跡が存在する所として知られ、第4図のように、当遺跡周辺は塩田川の段丘上に位置し遺跡はその台地上に分布している。1は上塩田遺跡（繩文・平安）、2は青木北遺跡（繩文・平安）、3は青木遺跡（繩文・平安）、4は高鳥谷遺跡（繩文・歴史）、5は石経遺跡（経塚）、6は栗林神社東遺跡（繩文・弥生・平安）、7は善込遺跡（弥生）、8は垣外上遺跡（弥生）、9は城村遺跡（中世）である。栗林神社東遺跡や善込遺跡は弥生時代後期（中島式）の大集落として考えられている。



第4図 上塩田遺跡周辺遺跡分布図 ($S=1/20,000$)

第 III 章 発掘調査

第1節 調査概要

昭和56年秋に、試掘調査を行い、土層、遺物の包含状態等を調査し、その結果、当遺跡の北西部分は表土下に礫層が堆積しており、遺物の包含層が無いと判断した。遺構の存在すると思われる区域は塩田川寄りの台地上であることが遺物の包含状態により確認された。

調査方法は、発掘調査に先立ち、遺跡の中心部分にあたる田の一角を基点として、台地の傾斜方向に対して、東西一南北軸にそろそろ $10\text{m} \times 10\text{m}$ のポイントを設定して、トレーナーを入れ掘り下げた。良好な遺物包含層をもつトレーナー部分を拡張し、遺構を検出する方法をとった。調査区は、調査対象区の西側より東側へ向って、A・B・C・D・E区に分かれることとなり、局部的な調査となった感が強い。

出土遺物については、トレーナーごとに一括して取り上げたものと、拡張区A～Eにおいて、第I・II層は一括し、第III層以下は、全点図面上にドットし、レベルを実測したものとに分かれた。

なお、A区については、トレーナー掘り下げ後、表土下第II層下位まで、ブルドーザーによる排土を行い、調査を実施した。

第2節 調査A地区遺構と遺物（第5図、図版1）

調査A地区からは土塙が5基検出されただけで、基盤は良好なロームではなく、人頭大位の礫（花崗岩が主）が砂質ローム上に露出していて、層位的にも、遺物を含む暗茶褐色土層の堆積が少ない状態であったが土塙はいずれも、砂質ロームと褐色土の混土層中より検出された。

第1号土塙

プランは、隅が丸味を帯びた平行四辺形を呈し、長軸が2m60cm、短軸が1m75cmを測る。中段をもち、10cm程掘り込まれ、さらに内側に南壁は兼ねる状態で20cm程掘り込まれている。断面形は舟底形を呈している。上層よりII・III層-IV層と堆積し、木炭・ローム粒を含む。南壁上及び南壁寄床面には直径50cmの平らな自然石が見られる。全体的に大型の礫が遺存している。

出土遺物は、8点出土しており、縄文中期の土器片が5点、短冊形打製石斧破片が1点、横刃形石器が1点、剝片が1点である。土器のうち、No.74・75・78は同一個体で胴底部片であり梨久保式系に比定される。石器類は硬砂岩製で、No.76は、幅12cm、長さ7.5cm、厚さ2.1cmを測り、重さ194gである。No.79は破片で、現長6.2cm、幅3.4cm、厚さ1.1cm、重さ28gを測る。

第2号土塙

1号土塙の北東にあり、プランは不整長方形を呈し、長軸が1m5cm、短軸が80cmを測る。深さは38cmで、断面形は鍋底形を呈する。III層が堆積し、一部にIV層とVI層が含まれている。底面には自然の礫が表出している。

出土遺物はNo.72の短冊形打製石斧1点が出土し、長さ11cm、幅5.8cm、厚さ2.1cm、重さ192gで片麻岩製である。

第3号土塙

2号土塙の北東にあり、1号～3号まで直線上に並ぶ状態である。プランは、60cm×63cmのほぼ円形を呈し、深さ28cmを測り、断面形は鍋底形を呈する。上層よりIV・V層-III層が堆積し、木炭を含む。底面には自然の礫が表出している。出土遺物はない。

第4号土塙

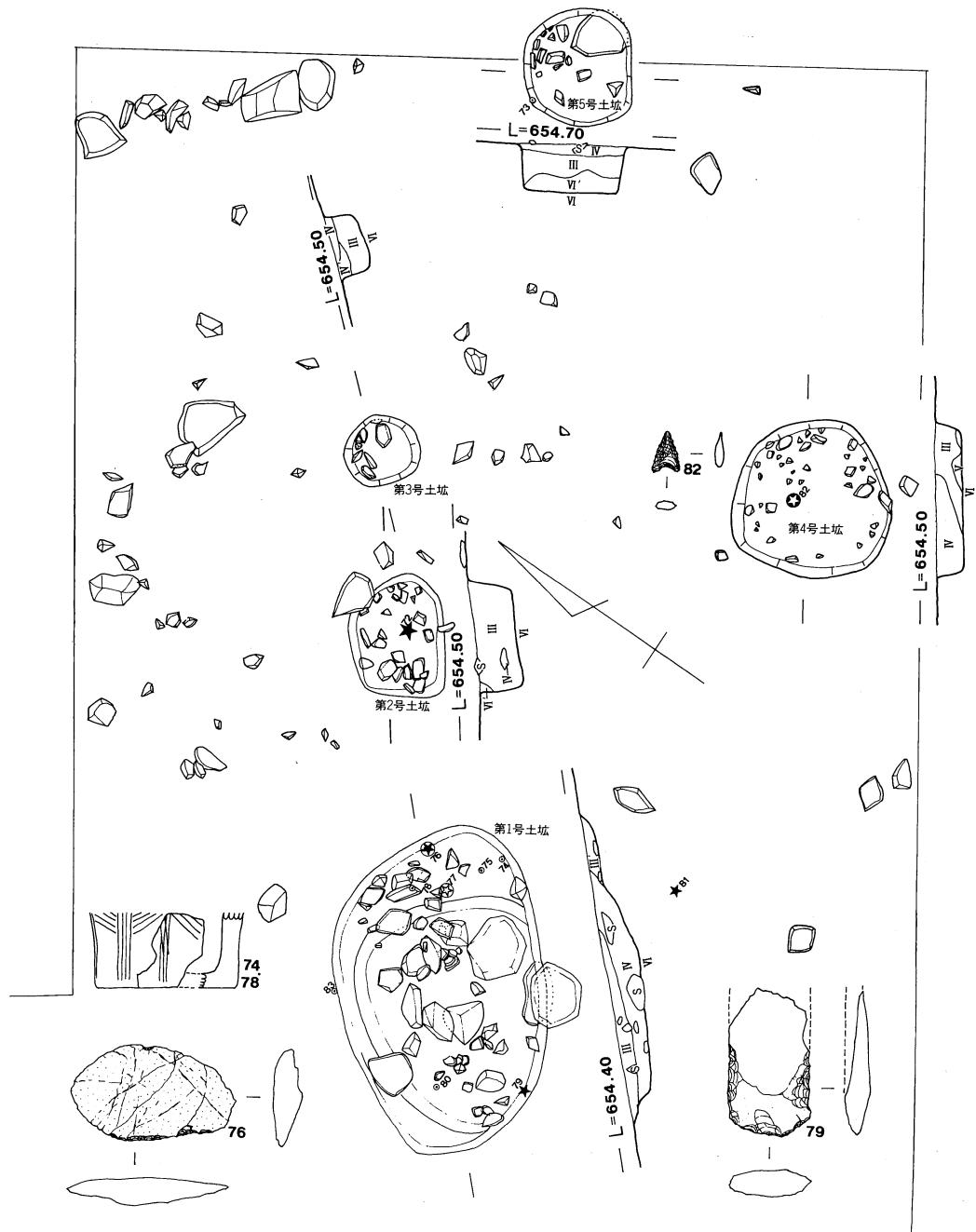
3号土塙の南東に位置し、プランは直径1m35cmのほぼ円形を呈する。深さは23cmを測り、断面形は、タライ底形を呈する。III・IV層が並列的に堆積し、床面にV層が遺存している。各層ともに木炭を含んでいる。底面には小礫が表土している。

出土遺物は、No.82の打製石鎌の完形品が出土している。無茎石鎌で、長さ1.7cm、幅1.2cm、厚さ3.3mmを測り、重さ1gである。側面の調整はやや粗く、鋸歯状を呈している。黒曜石製である。

第5号土塙

4号土塙の北東にあり、プランは1m×90cmのほぼ円形を呈する。深さは42cmを測り、断面形は、鍋底形を呈する。上層よりIV-III-V層が堆積し、底面には平らな大形の自然石をはじめ礫が表出している。

出土遺物は1点で、無文の胴部片であるが、縄文時代中期のものと考えられる。



* ●—縄文中期土器 ☆—剥片 ★—剥片石器 ★—打製石斧 ◆—石鎌

第5図 A地区第1~5号土塚実測図、出土遺物分布図及び実測図 (S=1/60、遺物は1/3、No.76のみ1/6)



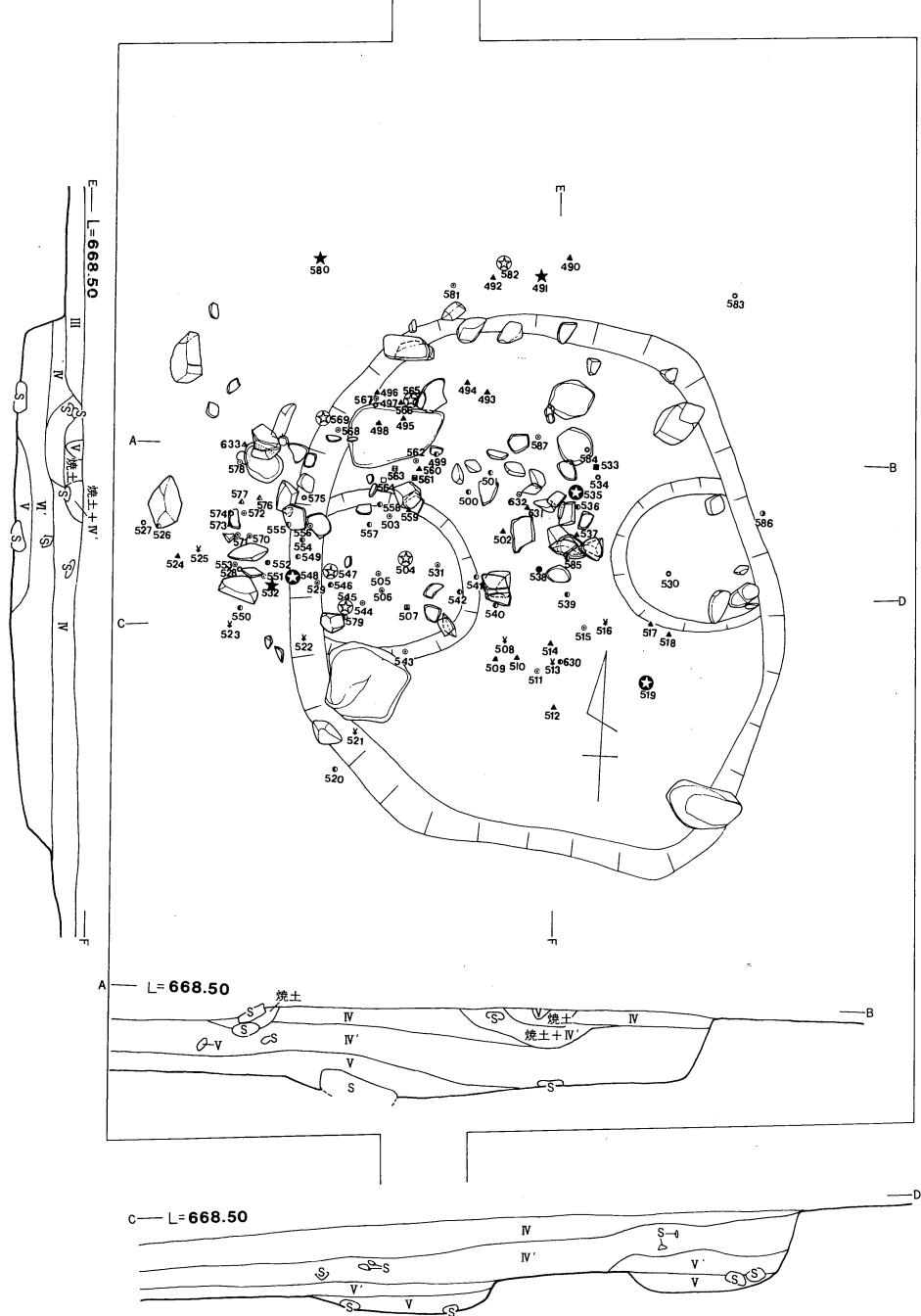
※ ¥ - 繩文早期土器 ● - 繩文前期土器 ○ - 繩文中期土器 △ - 繩文後期土器
 ● - 土師器 ■ - 須恵器 ▲ - 黒曜石 ★ - 打製石斧 ▲ - 敲打器 ◎ - 剥片 ⚪ - 石鎌
 □ - 搔器 ▲ - 石匙 △ - 石錐 ★ - 剥片石器 □ - 灰釉 ○ - 繩文晚期土器

第6図 B地区第1号住居跡覆土遺構実測図、遺物分布図、及び実測図 (S=1/60、遺物実測図は1/3)



※ ¥—縄文早期土器 ●—縄文前期土器 ○—縄文中期土器 ◎—縄文後期土器
 ●—土師器 ■—須恵器 ▲—黒曜石 ★—打製石斧 ▲—敲打器 ◎—剥片
 △—搔器 ▲—石匙 ▲—石錐 ★—剥片石器 □—灰釉 ○—縄文晚期土器

第6図 B地区第1号住居跡覆土構造実測図、遺物分布図、及び実測図 (S=1/60、遺物実測図は1/3)



第7図 B地区第1号住居跡実測図及び遺物分布図 (S=1/60)

第3節 調査B地区遺構と遺物（第6～8図、図版2・3）

第1号住居跡

プランは、不整楕円形を呈し、長軸が4m30cm、短軸が4mを測る。深さは、東壁が55cm、西壁が20cm、南壁が20cm、北壁が35cmで、南、西壁が浅く傾斜している。床面は柔らかく、東・西壁に直径1m40cm前後、深さ20cm前後の掘り込みをもつ。北壁寄りの覆土には、2ヶ所の焼土集中区があり、いずれも凹状に焼土・木炭が遺存していたが、炉址・カマドといった形態はもっていない。定住したための焼土ではなく、たき火跡的性格をもつと考えられる。

出土遺物は、覆土上層の焼土集中区から土師・須恵・陶磁器が多く、覆土下層から床上にかけては、縄文時代前期（黒浜式、巾田式系）、早期（茅山上層式系）の土器や石器が出土している。第6図中1は、内黒土師器の壺で、口径14.6cm、底径5cm、高さ4cmを測り、暗文を雜に施し、底部は糸切底である。第8図中56～554は、黒浜式系で高さ22.5cm、口径14cm、底径7cmの深鉢形土器である。繊維を多く含む。同図中433～484は、無繊維、513・630は、含繊維である。



第8図 B地区第1号住居跡出土遺物実測図（S=1/3）

第4節 調査C地区遺構と遺物（9～12図、図版3）

配石址

第9図中央の点線で結んだ部分に、花崗岩を主にして長軸2m20cm、短軸2mの配石址が遺存していた。北西部分は礫がなく、明確な橢円形を呈してはいない。

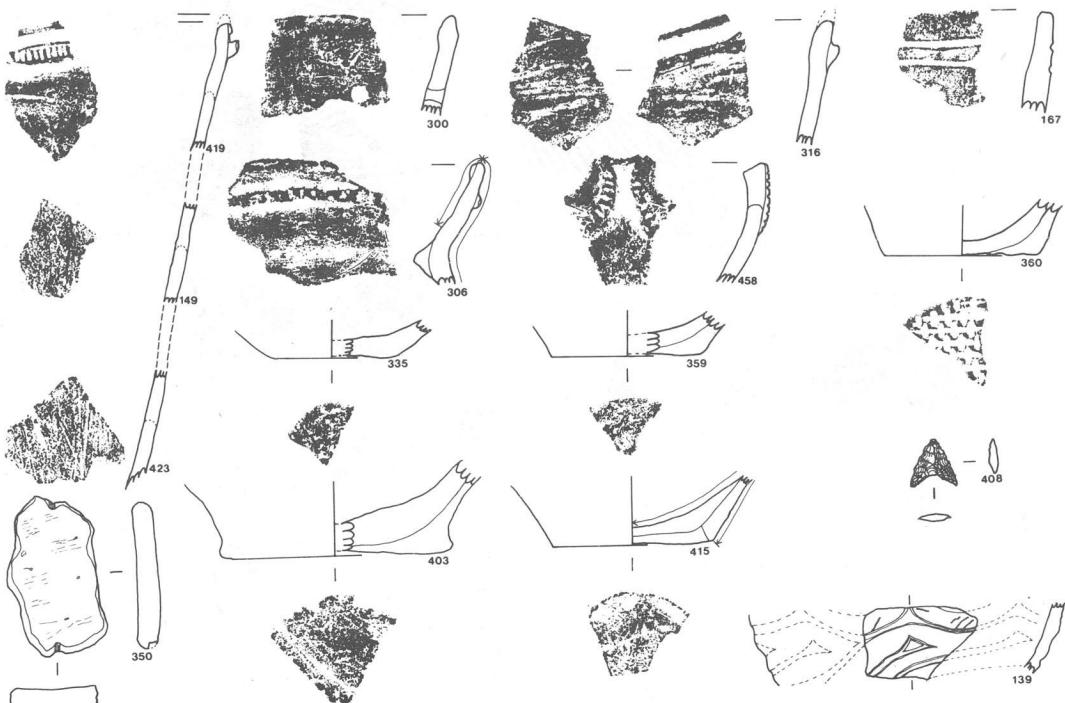
覆土や下層からは、繩文時代後期堀之内式の土器片が出土している。

ピット群

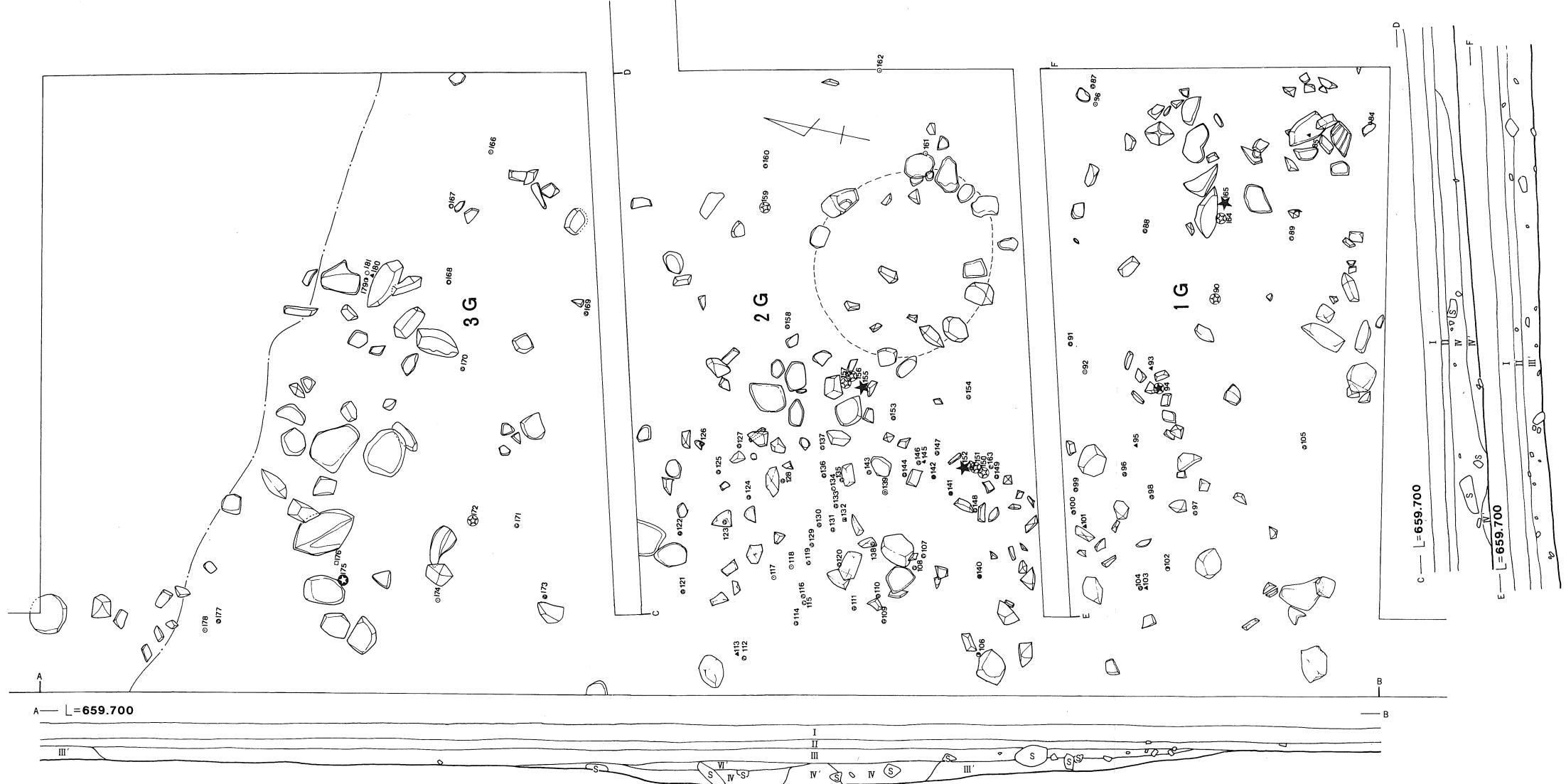
C地区のほぼ中央配石址の下層より西にかけてピット群が検出された。

P1～11まで検出され、深さは13～38cmと一定ではない。形状は、不整円形から橢円形とあり、P6・8・11は斜めに掘り込まれている。基盤はローム層ではなく、暗茶褐色土層に掘り込まれ黒色土で埋っていた。配列は不明確であるが、P2～4がほぼ直線的に並び、P8・9とP7・10が向い合う状態であり、よってP2～10までが遺構的性格をもつと考えられる。

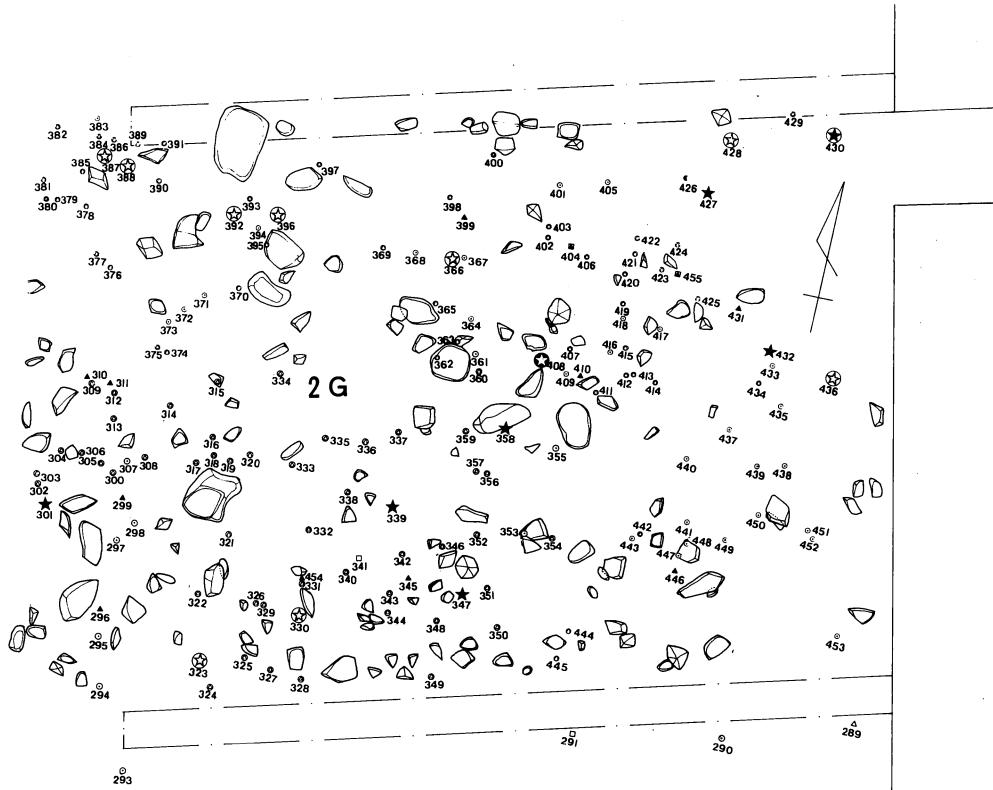
遺跡は主なものを第9図に掲載した。No.149・419・423は波状口縁をもつ深鉢形土器で同一個体である。No.316も同様に波状口縁をもつ深鉢形土器の口縁部分である。No.300は穿孔があり焼成前からあけられていたと考えられる。No.367は、ヘラ先で2条の沈線を施している。No.306、No.458は凸帯の上にヘラ先で刻み目を施す。底部5点の内、No.335・360・415は網代底で、他は木葉痕がある。No.350は無文の胴部片を利用した土錘。No.139は、佐野II式に比定される。



第9図 C地区出土遺物実測図 (S=1/3)



第10図 C地区1～3G遺構実測図及び遺物分布図 (S=1/60)

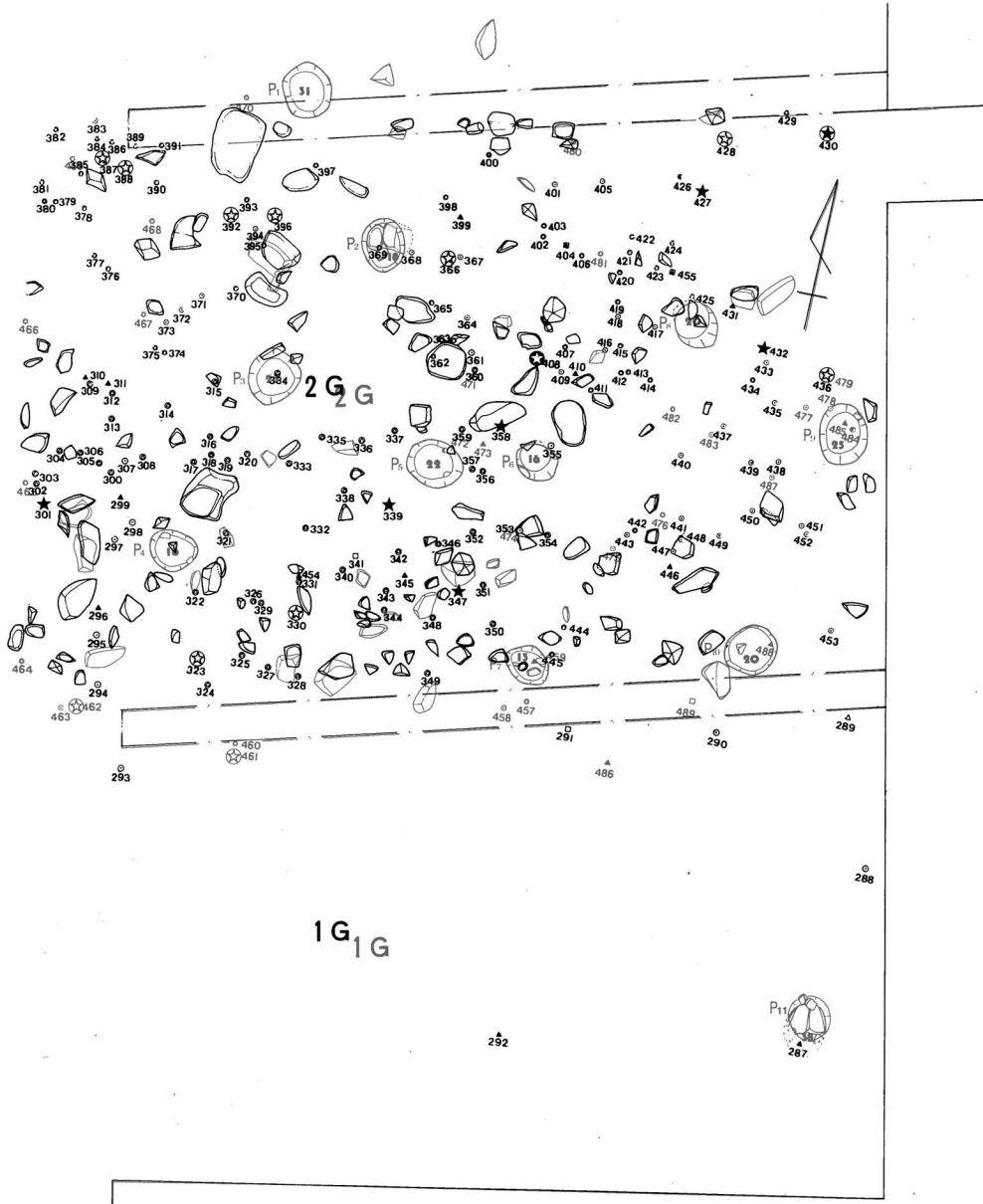


1 G

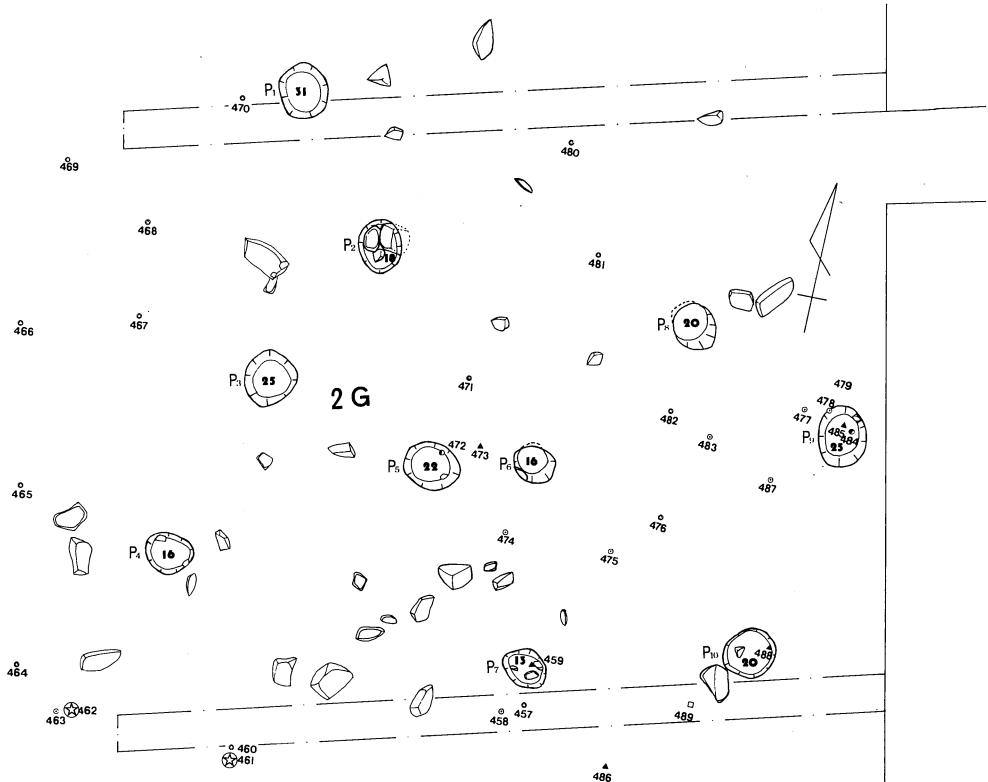
292

287

第11図 C地区1・2G出土遺物分布図 (S=1/60)



第11図 C地区1・2G出土遺物分布図 (S=1/60)



第12図 C地区1・2Gピット群及び出土遺物分布図 (S=1/60)

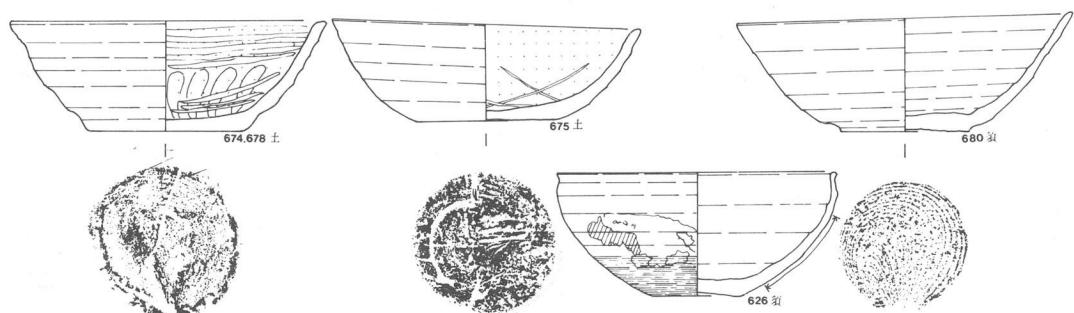
第5節 調査D地区遺構と遺物（第13・14図、図版3・4）

第2号住居跡

砂質ロームと礫が混じる基盤に傾斜して住居跡が構築され、掘り込みは30cm前後である。柱穴はなく、覆土から床面にかけて焼土の集中個所が3ヶ所あり10cm前後堆積していた。出土遺物は掘り込み部覆土から床面にかけて集中していた。床面は柔らかである。遺物は、土師器、須恵器が主体を占める。14図中、No.674・678は口径12.4cm、底径6cm、高さ4.4cm、675は口径12.2cm、底径5.4cm、高さ4.1cm、680は口径13cm、底径5cm、高さ4.7cm（完形）、626は口径22cm、底径7cm、高さ9.8cmを測る。626は浅鉢で、他は壊である。総じて10C以降である。



第13図 D地区第2号住居跡実測図及び出土遺物分布図 (S=1/60)

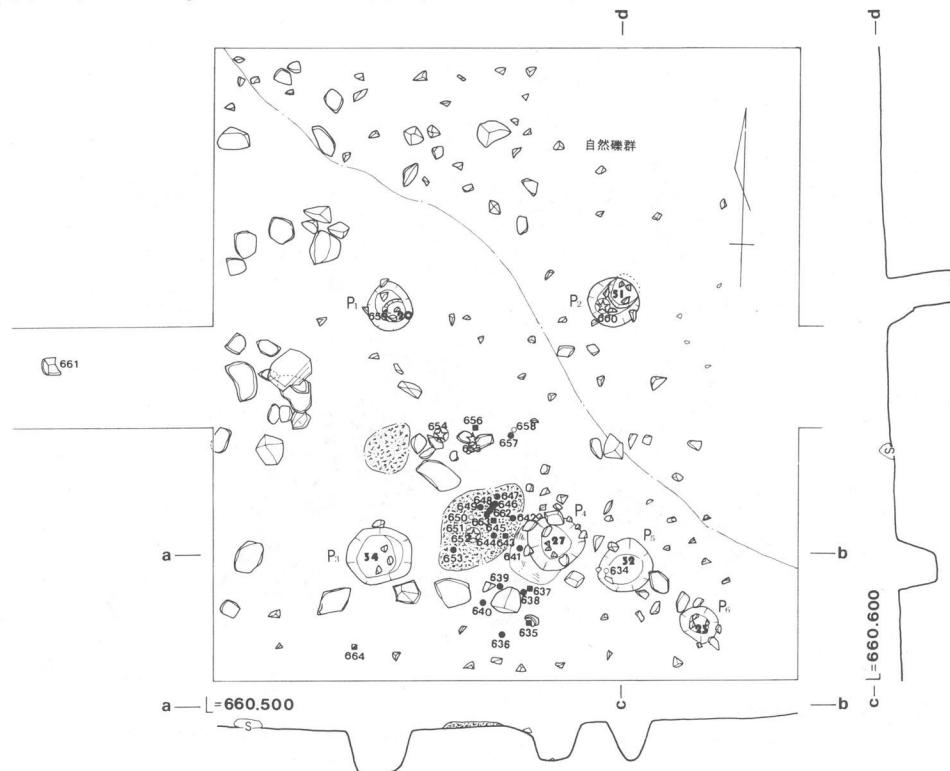


第14図 D地区第2号住居跡出土遺物実測図 (S=1/3, No.626のみ1/6)

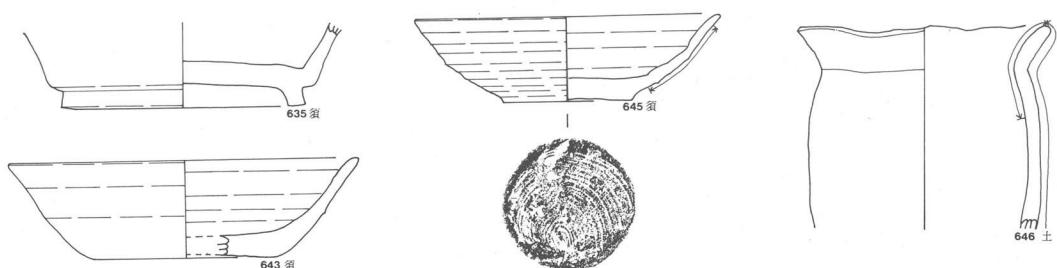
第6節 調査E地区遺構と遺物（第15・16図、図版4）

第3号住居跡

第2号住居跡同様に砂質ロームと礫が混じる基盤に設けられているが、焼土と柱穴と考えられるピットが遺存しているだけで掘り込みはない。ピットは6本あり、深さは20~51cmを測り一定していない。P1~5までが遺構的性格をあらわす。出土遺物はピットに囲まれた2ヶ所の焼土の周辺に集中して分布している。第16図中、No.635、643、645は須恵器の壊で635は高台が付く。634は口径13.8cm、底径7cm、高さ3.9cm、645は口径12cm、底径5cm、高さ3.4cmを測り、底部に粒殻痕が残っている。No.646は小形の甕で、口径が10cm。総じて10C以降である。



第15図 E地区第3号住居跡実測図及び出土遺物分布図 ($S=1/60$)



第16図 E地区第3号住居跡出土遺物実測図 ($S=1/3$)

掲載遺物一覧表

挿図	番号	種別	形態	時代及び時期	計測値及び特徴
第5図	74・78	土器	深鉢型・底部	縄文中期前葉	底径6cm。明褐色。石英粒多し。
"	76	石器	剥片石器	縄文中期	長さ7.5cm。幅12.2cm。厚さ2.1cm。硬砂岩。
"	79	"	打製石斧	"	現長6.2cm。幅4cm。厚さ1.1cm。硬砂岩。頭部欠く。
"	82	"	石鎌	"	長さ1.8cm。幅1.1cm。厚さ4mm。黒曜石。完形。調整良好。
第6図	1	土師器	壺	10C以降	口径14.6cm。底径5cm。高さ4cm。長石・石英多し。内面黒色、暗文雅。外面淡黄褐色。内外ナデ。焼成良。2/3残
"	11	"	壺・口縁部	"	口径11.2cm。長石・石英・雲母多し。内面黒色。外面暗灰色。内外ヨコナデ。焼成良。1/10残
"	A	"	〃・底部	"	底径6.2cm。長石多し。内面黒褐色。外面淡褐色。内外ヨコナデ。焼成良好。1/5残。
"	B	"	小形甕・口縁部	"	口径12cm。長石・雲母多し。暗褐色。内外ヨコナデ。焼成良。内外スヌ若干付着。1/10残
"	C	青磁器	碗・胸部	14C以降	胴径10.2cm。釉色淡緑色。胎土灰白色で堅致。文様外面蓮華文内面衛描文。1/10残。
"	D	"	〃・〃	"	胴径9.0cm。釉色灰緑色。胎土灰白色で夾灰雜物混じる。外面胴下半部に稜をもつ。1/6残。
"	E	"	〃・底部	"	底径3.8cm。釉色淡灰緑色。胎土灰白色で堅致。底部ヘラ切り。調整やや粗い。1/2残。
第8図	56～554	土器	深鉢形	縄文前期	口径7cm。底径7cm。高さ22.2cm。繊維含む。色調淡褐色。輪積み。単節斜縄文。穿孔あり。木葉痕。
"	433～484	"	"	"	色調・暗褐色。胎土・長石・石英・金雲母多し。焼成良好。口唇部半纏竹管の押し引き。平行沈線・三角状文・斜縄文。
"	513・630	"	"	縄文早期	色調・外面淡褐色、内面暗褐色。繊維・金雲母多く含む。口唇部刺突。外面は平行押し引き、内面棒状工具の条痕文。
"	224	石器	サイドスクレイパー	縄文	長さ2.5cm。幅4.3cm。厚さ1cm。チャート。刃部は鈍角であるが調整はていねい。
"	238	"	ピエス・エスキーユ	"	長さ2.3cm。幅4cm。厚さ1.2cm。黒曜石。下方は上部からの打撃により、反作用として剝離。
"	248	"	サイドスクレイバー	"	長さ1.7cm。幅2.8cm。厚さ5mm。黒曜石。刃部片面のみ調整。石質普通。
"	249	"	石匙	"	長さ2.4cm。幅2.6cm。厚さ6mm。黒曜石。刃部のみ調整。石質やや悪し。
"	255	"	ピエス・エスキーユ	"	長さ1.8cm。幅3.3cm。厚さ9mm。黒曜石。下方から上部にかけて3点打撃。刃部波状。
"	519	"	石鎌	"	長さ2cm。幅1.4cm。厚さ3mm。黒曜石。調整ていねい。
"	535	"	"	"	長さ2.5cm。幅2.1cm。厚さ7mm。黒曜石。未製品。
"	548	"	"	"	長さ2.4cm。幅1.2cm。厚さ3mm。黒曜石。調整極めて良好。
"	561	"	エンドスクレイバー	"	長さ4cm。幅2.7cm。厚さ1.1cm。黒曜石。刃部・頭部・両端調整。刃部波状。
"	563	"	石錐	"	長さ3.4cm。幅3.1cm。厚さ1.2cm。黒曜石。刃部欠く。左側面及び上部は、押圧剝離。
"	576	"	石匙	"	長さ3.5cm。幅1.8cm。厚さ9mm。黒曜石。刃部及びつまみ部調整。
"	577	"	"	"	現長2.5cm。幅3cm。厚さ8mm。黒曜石。刃部欠く。表面自然面残る。
"	633	"	石錐	"	長さ4cm。幅最大1.6cm。厚さ4mm。黒曜石。刃部調整ていねい。上端自然面多し。
第9図	149～423	土器	深鉢形・口縁～胴	縄文後期	色調・外面淡黄褐色、内面灰褐色。胎土長石・石英多し。焼成良好。口唇部肥厚。口縁部凸帯にヘラ先で刻み目。
"	300	"	〃・口縁部	"	色調・外面灰褐色、内面淡灰色。胎土長石・石英雲母多し。焼成良。口径5mmの穿孔あり。(焼成後)。外面スヌ付着。
"	306	"	〃・〃	"	色調・内面淡褐色。胎土長石・石英の粗い粒多し。焼成良。口唇部・頭部肥厚。口縁部凸帯に刻み目。外面スヌ
"	316	"	〃・〃	"	色調・外面暗褐色、内面淡褐色。胎土石英粒粗いもの含む。波状口縁をもち、口唇部下に凸帯をつけ、ヘラミガキ。
"	335	"	浅鉢形・底部	"	色調・内面淡黃褐色。胎土粗い長石・石英多し。底径4.8cm。焼成良。底部網代底。
"	359	"	深鉢形・〃	"	色調・内面淡黃褐色。胎土粗い長石・石英多し。底径6.0cm。焼成良。底部網代底。

挿図	番号	種別	形態	時代及び時期	計測値及び特徴
第9図	360	土器	深鉢形・底部	繩文後期	底径6.2cm。色調内外面暗褐色。胎土長石・石英多し。焼成良。底部網代底。
"	167	"	"・口縁部	"	色調、内外面淡褐色。胎土こまかい砂粒を含む。焼成良。文様棒状施文具で、口縁に沿って2条の沈線をつける。
"	403	"	"・底部	"	底径9.2cm。色調、内外面灰褐色。胎土粗い長石・石英含む。焼成良。底部網代底。
"	415	"	"・"	"	底径6.4cm。色調、内外面暗褐色。胎土長石・石英多し。焼成良。外面スス付着。底部木葉痕。
"	139	"	浅鉢形・胴部	繩文晩期	胴径12.4cm。色調、地は淡褐色、内外赤色塗彩。文様は肉彫の上に細い繩文を施す。焼成良。
"	350	土製品	土錐	繩文	長さ6.4cm。幅3.5cm。厚さ9mm。重さ25g。無文の胴部片を使用。2ヶ所に抉りを入れる。
"	408	石器	石鎌	"	長さ1.9cm。幅1.8cm。厚さ3mm。黒曜石。調整はていねい。石質良。
第14図	674-678	土師器	壺	10C以降	口径12.4cm。底径6cm。高さ4.4cm。色調明褐色。胎土金雲母・粗い小石を含む。内面黒色。右回り糸切り底。4/5。
"	675	"	"	"	口径12.2cm。底径5.4cm。高さ4.1cm。色調淡褐色。胎土金雲母・砂利を含む。内面黒褐色。ゆがむ。2/3。
"	680	須恵器	"	"	口径13.0cm。底径5cm。高さ4.7cm。色調灰青色。胎土金雲母・砂利と小豆大小石含む。定型。ゆがむ。
"	626	"	碗	"	口径22cm。底径7cm。高さ9.8cm。色調灰青色。胎土長石・石英含む。胴下半部へラケズリ。外面スス付着。
第16図	635	"	高台付壺	"	底径9.6cm。色調白青色。胎土粗い長石・石英含む。焼成良好。内面壁にそってたまりをもつ。
"	643	"	壺	"	口径13.8cm。底径7cm。高さ3.9cm。色調明灰青色。胎土粗い長石含む。口唇部肥厚。底部厚い。
"	645	"	"	"	口径12cm。底径5cm。高さ3.4cm。色調灰青色。胎土堅致。焼成良好。外面スス付着。底部頬痕あり。
"	646	土師器	小形壺・胴上半部	"	口径10cm。色調明褐色。胎土・長石・石英・銀雲母多し。内面胴上半にオコゲ、外面スス付着。調整難。

第 IV 章 まとめ

上塩田遺跡は、伊那山脈の一要所である高鳥谷山及び火山峠に源を発する塩田川の右岸段丘上に位置し、地質基盤は礫層からなりその上に新期ロームが堆積している。

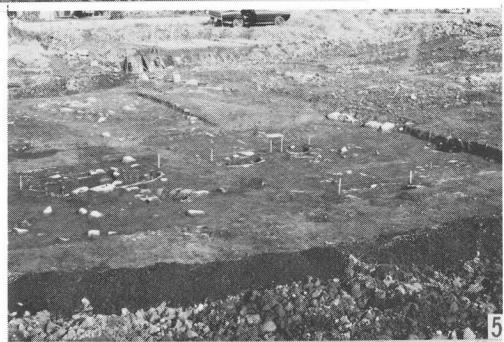
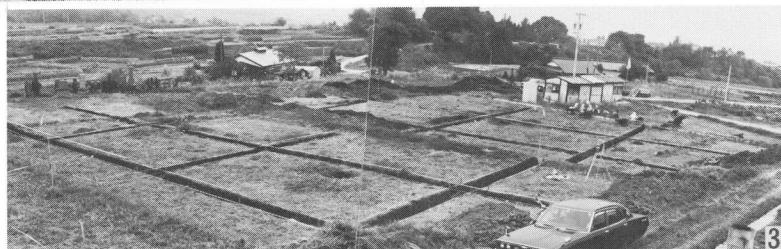
発掘調査によって確認された遺構は、繩文時代前期の住居跡1軒（B地区第1号住居跡）、同時代中期の土塙5基、同時代後期の配石址1ヶ所、ピット群、平安時代の住居跡（D地区第2号住居跡、E地区第3号住居跡）2軒、同時代の焼土集中区（B地区第1号住居跡覆土）である。前期の住居跡は砂質ローム層に掘り込まれ、後期のピット群は暗褐色土層に掘り込まれている。平安時代の住居跡2軒はいずれも砂質ロームと礫の混土層に構築され、堅穴であっても柱穴がなく、柱穴があっても掘り込みがないという状態で焼土が遺存していた。遺物は焼土周辺に集中していたが、直接的な居住の場でなく、間接的又は一時的な居住の場として考えられる。

当遺跡から出土した遺物は、遺構に伴うものとして、繩文時代早期（茅山上層武系）、前期（黒浜式、巾田式系）、後期（掘之内II式系）、晩期（佐野II式系）、繩文時代に属する打製石斧、石鎌、石匙、ピエス・エスキュ、サイドスクレイパー、エンドスクレイバー等、平安時代（10C以降）の土師器、須恵器が主を占める。

また、遺構に伴わないものとして、灰釉陶器片、陶器（瀬戸産、美濃産）、青磁器等の破片が数多く出土している。これらは、今回の調査区域よりさらに上段の段丘上に、これらを使用した人々の生活の跡・生産・居住の跡があると考えられる。

（小原晃一）

図 版



1 上塩田遺跡遠景

2 同 近景

3 調査風景

4 調査A地区全景
(北より)

5 同 上(南より)

6 土塙1号土層状態

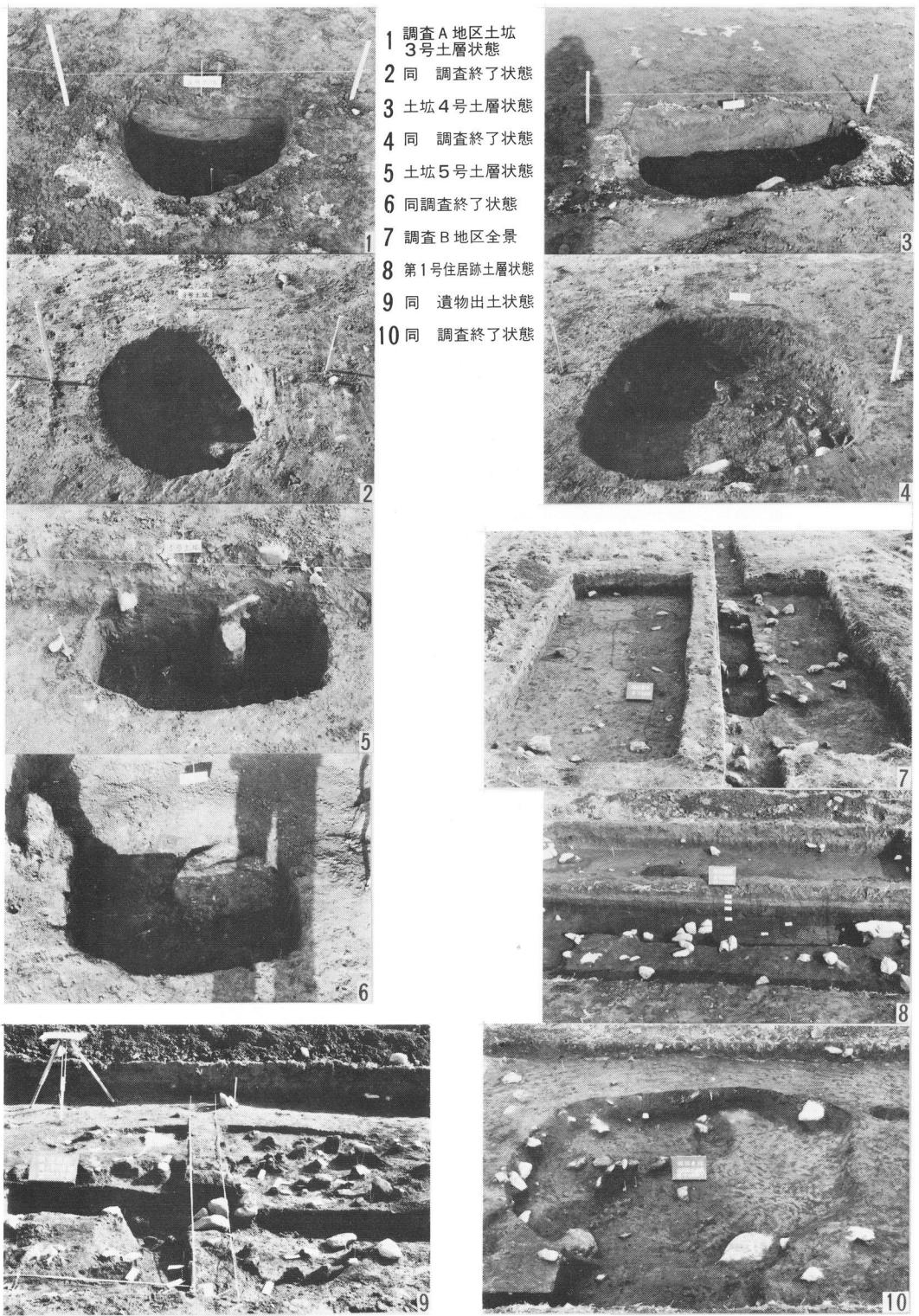
7 同 調査終了状態

8 土塙2号土層状態

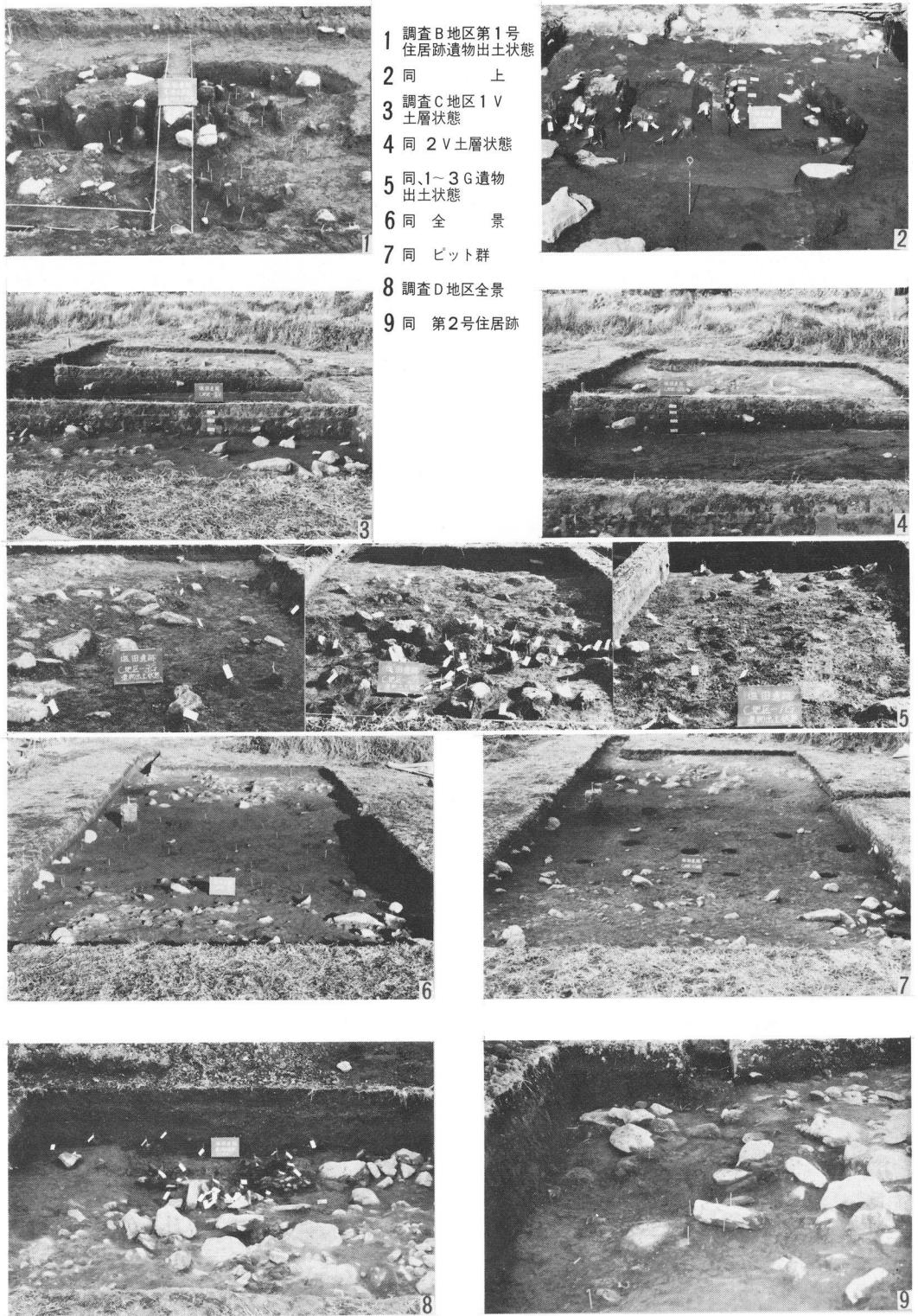
9 同 調査終了状態



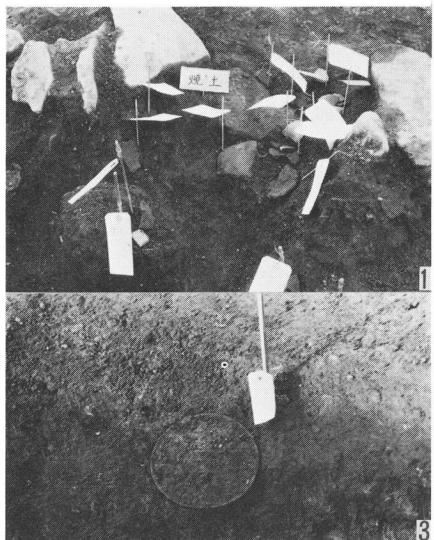
——図版1——



—図版2—



——図版3——



1 調査D地区第2号
住居跡遺物出土状態

2 同 上

3 同 上

4 同 上

5 調査E地区全景

6 同 近景

7 同 第3号住居跡
土層状態

8 同 第3号住居跡

9 同 遺物出土状態

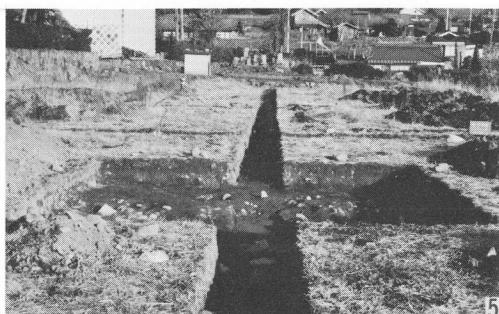
10 調査A～C地区
調査終了状態



2



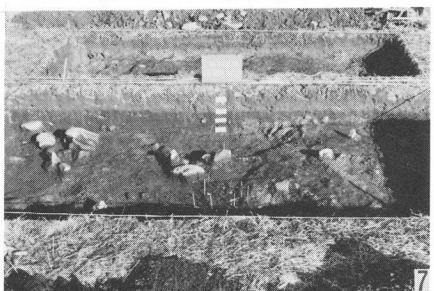
4



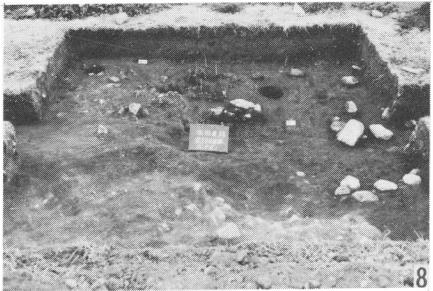
5



6



7



8



9



10

上 塩 田 遺 跡

——緊急発掘調査報告——

昭和58年3月20日 印刷

昭和58年3月25日 発行

編集 駒ヶ根市上穂南2-15市立駒ヶ根博物館内

県営ほ場整備事業駒ヶ根東部地区

埋蔵文化財調査会

発行 伊那市青木町伊那合同庁舎内

南信土地改良事務所

駒ヶ根市赤須町20-1

駒ヶ根市教育委員会

印刷 伊那市みすず下川手

(株)小松総合印刷所